

「香散見草」床中雑感

芸学部文学科 准教授 奈古忠國

難波津に咲くや此の花冬籠もり

今は春べと咲くや此の花

『古今和歌集』仮名序にある歌である。「香散見草」も「此の花」も梅の別称である。梅の種類も数が多いが、その呼び方も様々だ。「好文木」・「此の花」・「初名草」・「風待草」・「匂草」等、いずれも優雅な呼び方である。

嘗てこの梅の花が本学の校章であった。学生手帳には難波津の歌も記されていたのを記憶している。どなたの発案か知りたくて、故世耕政隆総長に尋ねたことがあった。結局、今日まで判らず仕舞である。

昭和45年、図書館が改装された時、当時の図書館長の小野村資文先生が「図書館報の名前も新たにしたい。良い名前を考えて戴きたい」と言われたことが昨日のごとくに思い返される。あれこれ勘案した挙げ句の「かざみぐさ」命名であった。ご褒美に宴席を設けてくださり、その折、専門の法学の話はそっちのけで、花卉の話に熱弁を振るわれた。総長の薔薇談義やノウゼンカズラの話。お二人とも植物にも詳しい人であった。懐かしく思い返される。

今の校章も素敵であるが、小生にはどうにも梅の花弁に見えて仕方がない。あるいは、梅をも連想させようという思いが総長におありだったかも知れない。

1月の末、最終講義に臨んだら、教卓に花が飾られてあった。贈られた花束を持って帰りソファに腰掛けぼんやり眺めていると、どうにも良い香りが漂ってくる。近づいてみると、花束の中に臘梅が三本。寒い季節に、花の少ない冬に、何とも嬉しい。当局の温かい心遣いがしみじみと伝わってきた。やはり

梅であったのだ。

後日、研究室で『大漢和辞典』、『大日本国語辞典』を始め、辞典類を片端から調べた。ゼミの学生たちも見慣れない漢字に興味ありげであった。お陰で陰暦12月のことを臘月ということも知った。これから先どれほど生きられるか、とんと見当が付かないけれど、使える日があるならば極月を止めて臘月と書きたいと思うばかりだ。

立春が過ぎたけれど、寒さはなかなか緩まない。薔薇や牡丹が植わっている庭に出て水を遣ろうとしたが、ホースから水が出て来ない。凍ってしまった。水遣りを諦めて部屋に戻り、テレビを付けると、NHKで柳原和子の「百万回の永訣」をやっていた。ノンフィクション作家が癌と闘う姿にしばし釘付けになった。昨年癌で亡くなった妹と重なった。ノンフィクション作家が一喜一憂しながら癌と闘う姿に眼が離せなくなった。あちらこちらの病院を巡り、医者と共に病魔と闘っていた。そして、画面が変わり、狭山の近畿大学附属病院が映し出された。彼女の姿は消化器内科に。癌治療の権威でもある工藤正俊先生との遣り取りの中で、彼女の顔に笑みが浮かんだ。ドクターの優しい説明が彼女の気持ちを明るくしたのだ。気が付いたら小生も一緒に笑っていた。とにかく嬉しかった。工藤先生が他の科の先生と連携して彼女の治療に専念する姿は素晴らしいと思った。自分が同じ近畿大学の一員であることが誇らしかった。柳原和子は2008年に逝った……。

狭山の附属病院は木に囲まれた閑静な所にある。小生も2か月に1回、消化器内科で診察を受ける。主治医は汐見幹夫先生である。

医学部設立の昭和49年度の一期生である。当時、「クラブ（ワンダーフォーゲル）の部長をやって欲しい」と押しかけて来た医学部生3人組の1人だったのだ。最初に診察を受けた時小生は判らなかつた。「奈古先生の講義、今でも覚えています」と言われ、顔を赤らめたのだった。いまは、小生が命を預けた大切なドクターである。

想えば、小生は実にドクターに恵まれている。初めて胃潰瘍で倒れたのが、沖縄旅行。留学生研修旅行引率者の一人として参加した折、那覇のホテルで大量吐血2600cc、2回目がマンションで2400cc、3回目が21号館204教室で午後9時15分に倒れたのを憶えている。この時は4000ccと聞かされた（八戸ノ里、中河内救命救急センター）。あちこちの病院で生命を救われてきた。

『徒然草』にある。「よき友三つあり。一つには物くるる友。二つには医師。三つには智恵ある友」

どうやら小生には天からこの三つが与えられていたようだ。幸せを感じる。近くEUS（超音波内視鏡）検査で附属病院に入院する。胆嚢に異物が発見されたからだ。「麻酔が冷める頃には結果が出ていますから」との主治医の言葉だ。

「悪性の物でも、これは早期発見ですよ？」と訊いた。汐見ドクターは、にこやかに笑って「そうです」と応えてくださった。気が少し和らいだ。

春夏秋冬それぞれに美しい。融合するかのごとく、季節を彩る草木もそれぞれにその個性を発揮する。山の麓で生活を始め、植物と接する機会も随分増えた。と同時に、季節の移ろいゆく姿に改めて驚くようになった。

庭に出て、草木と話していると野良猫が寄って来る。そして傍らに寝そべる。時には「ニャー」と声を掛けてくる。小生も「ニャー」と応える。悔しいのは、語彙不足で小生は「ニャー」以外猫語を知らないのだ。漱石家の猫はよく喋るが、小生の周りにいる猫はさほ

ど喋らない。そういえばホフマンのムルもよく喋る。我らの遣り取りを勘太郎は面白く思っただか、屋根の上から「カー」と一声。季節変われば、蛙、鶯、蛇、蛍、蜂、蝶、蟬と数え挙げればきりが無い。草木に寄りつく虫も多い。一つの花弁を視つめてみると、そこに集う生き物の多さに驚かされる。共に生きている生態を知らされる。そして、実はほんの少しの知識しか持ち合わせていないことを思い知らされる。

その穴を覆うべく本を開く、電子辞書で調べる、パソコンで検索する、iPadを持ち込む。面倒くさい時にはスマートフォンに入れた『大辞泉』を引く。しかし、なかなかこの穴は埋まらない。やはり死ぬまで勉強かなどと考える。近年益々漢字を面白く感じるようになった。知っている漢字の数も少ない。語彙不足を認めざるを得ない。穴を埋める最短距離はやはり読書か、としみじみ思う。机の上には『もうすぐ絶滅するという紙の書物について』（ウンベルト・エーコ、ジャン＝クロード・カリエール）が置いてある。まだ読み終えていない。

この地球上から紙が無くなる訳がなからう、という思いに駆られながらページをめくる。何とも愉しい。

病院に入院する時、必需品の他に恐らく読まないであろう本を何冊かバッグに放り込む。そして追憶するだろう。歩いてきた道程を……。大学生活を……。

11月ホールでの想いも尽きない。医学部人見先生の言葉に頷いた日もある。先達の言葉が頭を過る。メキシコへ向かう直前、世界の文化遺産に対する熱き思いを語られた並河萬里さん。講演を終えられ、氏と握手を交わし「行ってらっしゃい」と言った時、傍らの奥様の笑顔は素敵であった。今も脳裡に焼き付いている。

興味あることを夢中になって追っ掛けて行ったら、女神が微笑んでくれたとノーベル賞受賞の野依良治先生。結論は、「学問は単純・明快に」であった。

「今の日本は病気です。治るのをじっと耐えて待つ」そして「必ず治る」と小説家・五木寛之氏の言葉にも頷いた。五木氏はこの時、司馬遼太郎の『坂の上の雲』との出会いに熱弁を振るわれた。司馬遼太郎の日本を思う熱き心が伝わって来るように感じたのだった。作者は『坂の上の雲』の秋山兄弟を通し、やはり「単純・明快」を陳べている。

先日、11月ホールの前を通り、赤信号で待つ間、頭上の大きく拡がった櫛に語りかけた。「大きくなりましたね。これからも近畿大学を見守ってください」と。

昭和48年、大学に赴任した小生の研究室は本館の6階であった。本館前の公孫樹の木の高さは、2階の窓辺りであった。大きくなった。本当に大きくなったものだ。もっともっと大きくなって欲しい。そして、大学を、図書館を、大学で生きる人々を見守っていて欲しい。

時は来た。恰好よくサラ・ブライトマンの『ランニング』を聴きながら、お世話になった近畿大学を、静かに去りたい願う昨今である。39年間本当にありがとうございました。

そして心から願う。「香散見草」の成長を、近畿大学の発展を。

袖ひじて結びし水のこほれるを
春たつけふの風やとくらむ

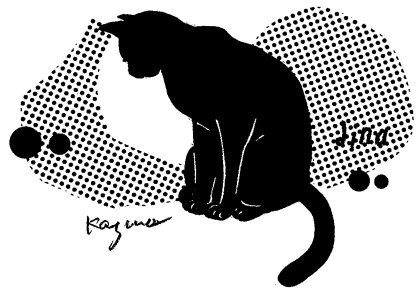
（『古今和歌集』）

立春が過ぎ、梅便りが聞かれるようになった。

最後に何かとお心遣いくださった中央図書館長・村瀬憲夫先生、そして図書館の矢田さん、居町さん、他の皆さんにお礼を申し上げ擱筆したい。



2011. 8. 2 トルコ、イスタンブールにて





自宅にて